

詩篇25-29篇「一緒にされない救い」

1A 罪を取り扱う苦しみ 25

1B 恥からの救い 1-3

2B 主の小道 4-10

3B 主を恐れる者 11-15

4B 大きくなる苦しみ 16-22

2A 誠実な歩み 26

1B 弁護の祈り 1-8

2B 贖い出し 9-12

3A 高嶺から降りる道 27

1B 敵の上に引き上げる方 1-6

2B 御顔の輝きの願い 7-14

4A 聖別された民 28

1B 悪者から離れる祈り 1-5

2B 喜びの小躍り 6-9

5A 主の栄光 29

1B 天から地へ 1-9

2B 大洪水の時の御座 10-11

本文

詩篇 25 篇を開いてください。私たちは再び、ダビデの嘆きの祈りから読みます。

1A 罪を取り扱う苦しみ 25

25 篇は、「アクロスティック」と呼ばれます。言語のヘブル語でこの詩篇を見ますと、ヘブル語の初心者でもすぐに気づくことがあります。文頭を縦に上から下まで見ていくと、アレフ、ベト、ギメル、ダレト…と、A,B,C,D というようにアルファベットに並んでいます。このことによって詞の美しさを出し、それから語んじる時に覚えやすいようにしています。

この詩は、ダビデが敵によって激しい憎しみを受けていますが、その苦しみの中で彼自身の罪の取り組んでいるところです。私たちには、三つの種類の苦しみがあります。一つは、ゆえもなく襲ってくる苦しみがあります。ヨブの受けた苦しみです。もう一つは、はっきりと罪を犯したことによって、その結果を被っていることがあります。そして三つ目は、教育的な苦しみであります。受けている苦しみは、自分の犯した罪によるものではないのですが、その苦しみによって自分の闇の部分に光があてられることです。取り組んでいなかった罪、キリストではなく自分自身を求めていた部分、こうしたものが明らかにされていきます。

ここでは、この三つ目の苦しみを取り扱っています。ダビデは、外からの敵に面しているのですが、その中で主との正しい関係を正していきます。苦しみに会った時は、どうすればよいですか？「その人は祈りなさい。(ヤコブ 5:13)」ですね。ダビデは祈り始めます。

1B 恥からの救い 1-3

25 ダビデによる 25:1 主よ。私のたましいは、あなたを仰いでいます。25:2 わが神。私は、あなたに信頼いたします。どうか私が恥を見ないようにしてください。私の敵が私に勝ち誇らないようにしてください。25:3 まことに、あなたを待ち望む者はだれも恥を見ません。ゆえもなく裏切る者は恥を見ます。

ダビデは、主を仰いでいます、そして信頼しています、さらに待ち望んでいます。その中で、「恥を見ないようにしてください」と祈り求めています。これは、信頼して、待ち望んでいるのに、その通りにならないで敵から馬鹿にされる、敵を喜ばせてしまうということです。むしろ、そのように主に期待しないで、裏切っている者たちが恥を見ますようにと祈っています。

ちょうどこれは、イエス様が十字架につけられて、葬られた後の弟子たちに似ているでしょう。この方こそキリストだと思っていたのに、むしろユダヤ人の指導者らがローマの十字架に付けるように仕向けて死んでしまったのです。「ああ、可哀想で哀れな人たちだ。偽メシヤを信じてしまったのね。」という嘲りを感じていたかもしれません。また不信者のユダヤ人から危害を受けるかもしれません。しかし、ペテロが第一の手紙 1 章でイザヤ書を引用してこう言っています。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。(2:6)」「失望させられることがない」という言葉は、「恥をこうむることはない」と訳すことのできるものです。

私たちの生活の中で、主を仰いでも、かえって救いではなく損になるように見える時があります。けれども、この石に信頼しましょう、決して失望させられることはありません。

2B 主の小道 4-10

25:4 主よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。25:5 あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください。あなたこそ、私の救いの神、私は、あなたを一日中待ち望んでいるのです。

次の祈り求めは、道を知らせてくださいということです。「道」からさらに「小道」と言っています。つまり、道が狭まっていることです。したがって、「狭い門」とイエス様が言われたことに通じます。多くの人々が選び取る道は広いのです、けれども真実というのは、いつも小道です。真理やまことと旧約聖書で訳されているのは、エレッツと言いますが、その元々の意味は「堅固である」ということで、大人が乳飲み子をしっかりと抱えている姿であります。堅固で変わらないのは、大勢の人々

は選び取らないで、変わって過ぎ去っていくことを選び取っていきます。

そこで私にその道を教えてくださいと、ダビデは願っています。イエス様は、「わたしが道です」と言われましたが、まさにイエスご自身を知ることであります。この方のなされること、また命令は、まさに自分を捨てることです。自分を生かすのではなく、殺すこと、十字架につけることです。ですから、ダビデはキリストの弟子になることをここで願っています。「一日中待ち望んでいる」と言っていますが、弟子として生きるのは一時間の学びによるのではなく、生活そのものであります。

25:6 主よ。あなたのあわれみと恵みを覚えていてください。それらはとこしえからあったのですから。25:7 私の若い時の罪やそむきを覚えていないでください。あなたの恵みによって、私を覚えていてください。主よ。あなたのいつくしみのゆえに。

三つ目の祈り求めは、「あわれみと恵みを覚えていてください」です。彼は、ここにあるように若い時の罪やそむきを思い出ししまっているのです。若気の至りという日本語がありますが、まさしくそれで、若さというのは知恵がなく拙速に動き、愚かなことをしてしまうという意味合いを含んでいます。そのために、何年経った後もその痛みや傷を負っていることがあります。「どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従ってそれを守ることです。(詩篇 119:9)」とあるのですが、そうできないことが多い訳です。

ダビデは、あわれみと恵みは「とこしえからあった」と強調しています。主は、私たちをキリストにあって選んでくださいましたが、それは世界の基が置かれる前であったとあります。「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。(エペソ 1:4)」もし、若い時の罪によってその後の人生を台無しにするようならば、神は初めから私たちを選びませんでした！とこしえから、ご自分の恵みによって私たちを選ばれたのですから、その恵みとあわれみは過去の罪に支配されないように守ってくださいています。

そしてダビデは、それをしてくださるのは自分のためではなく、「あなたのいつくしみのゆえ」と言っています。私たちが恵みによって救われたのは、神が慈しみのある方であることがほめたたえられるためです。私たちが今、ここにいることが、神がいかに恵みに満ちた方であるかを証しています。

25:8 主は、いつくしみ深く、正しくあられる。それゆえ、罪人に道を教えられる。25:9 主は貧しい者を公義に導き、貧しい者にご自身の道を教えられる。25:10 主の小道はみな恵みと、まことである。その契約とそのさとしを守る者には。

主は、罪人を義と認めることができます。その憐れみによって、キリストという罪の供え物によって、私たちの罪を赦し、正しい者とみなしてくださいます。ここの「貧しい者」とは、へりくだった者の

ことです。自分がどうしようもない罪人であると、心に強い貧困を感じている人のことです。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」とあります。

そして、「主の小道はみな恵みと、まこと」とあります。まさに、それはキリストの十字架であります。十字架は、罪人はみな死ななければいけないという神の真理を教えます。けれども、あなたが滅びない、あなたは義と認められるという恵みを教えます。ここでダビデはモーセによる古い契約を教えています。新しい契約にも当てはめることができます。キリストの流された血が、新しい契約のしるしです。その中に留まる者が、主の小道を歩んでいます。

3B 主を恐れる者 11-15

25:11 主よ。御名のために、私の咎をお赦してください。大きな咎を。

ダビデは、思い出してしまっています、若い罪を思い出します。また、その傾向が今、自分の心の中に未だにあることを悟ったのでしょう、それで咎をお赦してくださいと祈っているのです。罪が赦されたのに、また赦されるだろうと思って故意に罪を犯すような、そのような傲慢な罪から私をお守りくださいというダビデの祈りがありました。その罪から守られるよう、今、自分の内に神にそうした反抗心があることを告白しているのです。

25:12 主を恐れる人は、だれか。主はその人に選ぶべき道を教えられる。25:13 その人のたましいは、しあわせの中に住み、その子孫は地を受け継ごう。25:14 主はご自身を恐れる者と親しくされ、ご自身の契約を彼らにお知らせになる。25:15 私の目はいつも主に向かう。主が私の足を網から引き出してくださるから。

自分の心を探り、その罪を告白し、捨てる人は、「主を恐れる人」です。主を恐れることにある幸いをここでダビデは述べています。選ぶべき道が教えられて、幸せの中に住み、その信仰が次の人々に受け継がれます。これが約束です、皆さんが主から与えられた信仰は次の人々にバトンタッチするように、神は造っておられます。そして主との親しい交わりが約束されています。それから、自分が網から引き出す、つまり敵の罠から救い出されます。

4B 大きくなる苦しみ 16-22

25:16 私に御顔を向け、私をあわれんでください。私はただひとりで、悩んでいます。25:17 私の心の苦しみが大きくなりました。どうか、苦悩のうちから私を引き出してください。25:18 私の悩みと労苦を見て、私のすべての罪を赦してください。25:19 私の敵がどんなに多いかを見てください。彼らは暴虐な憎しみで、私を憎んでいます。25:20 私のたましいを守り、私を救い出してください。私が恥を見ないようにしてください。私はあなたに身を避けています。25:21 誠実と正しさが私を保ちますように。私はあなたを待ち望んでいます。

今、心が安定して、主を恐れる者に与えられる確信と、敵からの救いを話したばかりなのに、心の苦しみがさらに大きくなっていく悩みを神に訴えています。詩篇の中には、このように祈りの中で強い確信が与えられているのに、その後心が弱められているのです。しかし、ここで私はかえって慰めを受けるのです。心の悩みは、継続的な祈りが必要だということです。主にあって大胆にさせていただくこともあります、その後で同じ祈りを繰り返さなければいけないことがあります。しかし、そのことさえ主は許してくださっているのを知ります。主は忍耐して、私たちの祈りを聞いてくださり、また助けの手を何度でも差し伸べてくださるのです。

ダビデが 21 節で、「誠実と正しさが私を保ちますように」と祈っています。彼は心を探って、自分の罪が示されて、その赦しを求めています。そして揺るぎない心にしていただくことを願っています。これは私たちにとって、とても大切な過程です。良心がきめられていることが、ここで話している誠実さであります。罪を告白して、それを捨てて、癒された魂が主の憐れみの中で休みを得て、それからゆるぎない魂に変えられます。ですから「誠実」は、日本語でいう真面目のことではありません。

25:22 神よ。イスラエルを、そのすべての苦しみから贖い出してください。

ダビデは、イスラエルの歴史も同じであるので、代表して祈りを捧げています。

2A 誠実な歩み 26

26 篇は、25 篇の続きのようになっています。誠実と正しさが私を保ちますようにと祈ったダビデは、その誠実の中で攻撃を受けている敵から、主が守ってくださるように祈っている詩です。

1B 弁護の祈り 1-8

26 ダビデによる 26:1 私を弁護してください。主よ。私が誠実に歩み、よろめくことなく、主に信頼したことを。26:2 主よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためてください。26:3 あなたの恵みが私の目の前にあり、私はあなたの真理のうちを歩み続けました。

私たちが世に住んでいて、その悪によって自分が主にあってまっすぐ生きることができなくさせる時、主がその自分の誠実を弁護してくださるよう祈ります。イエス様は、世界で最も有能な弁護者であります。「もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護してくださる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。(1ヨハネ 2:1)」

ダビデは他の詩篇でそうでしたように、自分を調べてください、試みてくださいと祈っています。その動機が、いつも神の恵みに裏打ちされていて、また真理の中にいるかどうかを試さないといけません。自分の言っていること、やっていることは正しいこと、善に向かっていることかもしれないけれども、実は自分の立場を守るために自己防衛でやっていたり、自分の不満の腹いせであっ

たり、動機が汚されていることがあります。そう言ったものがないかダビデは祈っているのです。

26:4 私は、不信実な人とともにすわらず、偽善者とともに行きません。26:5 私は、悪を行なう者の集まりを憎み、悪者とともにすわりません。

詩篇 1 篇で、悪者と歩まず、あざける者のところに座らなかったという、幸いな人について書いてありましたが、それをダビデ自身が自分に適用しています。主によって与えられている誠実を保つべく、力を尽くして心を見張っています。私たちは、悪に対処しているようで、実はその悪の中に自分が入ってしまっていることがあります。イエス様が、「さばいてはいけません。さばかれないためです。(マタイ 7:1)」と言われましたが、自分自身もその悪を行なうようになっているから、その量りで裁かれるのです。

26:6 主よ。私は手を洗ってきよくし、あなたの祭壇の回りを歩きましょう。26:7 感謝の声を聞こえさせ、あなたの奇しいみわざを余すことなく、語り上げましょう。26:8 主よ。私は、あなたのおられる家と、あなたの栄光の住まう所を愛します。

ダビデは、主の家について、その幕屋についてそこに入る者が、清められた者であることを何度となく話しました。「だれが、主の山に登りえようか、だれが、その聖なる所に立ちえようか。手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった者。(詩篇 24:3-4)」手を洗って清くして、祭壇の回りを歩くというのは、礼拝に出るのに自分の心や行ないを清めるということです。仲直りについて、イエス様も似たようなことを語られましたね。「供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。(マタイ 5:24)」私たちは、礼拝の度に自分を主に知っていただく。そして、いつも主によって正される、そのことを喜びとしていく。このような態度で臨みます。

2B 贖い出し 9-12

26:9 どうか私のたましいを罪人とともに、また、私のいのちを血を流す人々とともに、取り集めな
いでください。26:10 彼らの両手には放らつがあり、彼らの右の手はわいろで満ちています。
26:11 しかし、私は、誠実に歩みます。どうか私を贖い出し、私をあわれんでください。

善を悪として、悪を善とするようなこの世において、自分がその中に取り込まれないように切に祈っている姿です。そして、その世から贖い出してくださるよう祈っています。おそらくソドムに住んでいたロトが同じ思いだったでしょう。「また、無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出されました。というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。(2ペテロ 2:7-8)」

26:12 私の足は平らな所に立っています。私は、数々の集まりの中で、主をほめたたえましょう。

すばらしいですね、祈りが聞かれています。「平らな所」というのは、自分が悪い者たちの大水の中で飲み込まれそうになっていた時、主が贖い出されてキリストの支配の中に移されているということです。そして、同じく主を愛し、主を恐れる者たちとその集まりの中で褒めたたえています。

私はとても幸いです、皆さんとこのように礼拝が共にできるからです。世において、いろいろな荒波があります。そこで必要なのは心にある誠実と正しさです。それは、神への礼拝を持つことによって保たれ、主によってその縄目から救い出される力が与えられます。

3A 高嶺から降りる道 27

次、27 篇はとても興味深い祈りになっています。初めは、高らかに勝利を歌っていますが、後半は急降下して、救いを必死に求める姿が描かれています。

1B 敵の上に引き上げる方 1-6

27 ダビデによる 27:1 主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。27:2 悪を行なう者が私の肉を食らおうと、私に襲いかかったとき、私の仇、私の敵、彼らはずまずき、倒れた。27:3 たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れない。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。

ものすごい、信仰から生じる強靱な姿勢です。ここまで強くなれている源泉は、もちろん主ご自身です。「主は、私の光、私の救い。」とあります。旧約聖書で、神が光と書かれているのはここが初めてだそうです。新約聖書には数多いです。神が光であり、そして救いであるという言葉に近いのは、テモテ第一 6 章 15-16 節にあります。「その(イエス・キリストの)現われを、神はご自分の良しとする時に示してください。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものであります。アーメン。」主イエス・キリストが光をもって現れる時に、そこに大いなる救いがあるということでもあります。

イエスが、王の王、主の主として来られる時に、攻撃をしてくる敵どもをことごとく滅ぼされるのですから、その方が味方なのですから、敵が自分の肉を食らおうと、彼らのほうが倒れてしまします。私たちが、いろいろな面で攻撃を受ける時に、審判者であられる主が戻ってこられることを思っています。

27:4 私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。27:5 それは、主が、悩みの日に私を隠れ場に隠し、その幕屋のひそかな所に私をかくまい、岩の上に私を上げてくださるからだ。27:6 今、私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。私は、その幕屋で、喜びのいけにえをささげ、歌うたい、主に、ほめ歌を歌おう。

26 篇と同じく、敵から救われるための強い確信は、主の家の中にいること、神と交わり、礼拝することから生じています。私たちが悩む時、隠れ場となってください。そして、私たちを立たせてくださる岩となられます。それから、敵に虐げられるのではなく、余裕をもって敵を眺めることができるように、高く上げてくださいます。

2B 御顔の輝きの願い 7-14

27:7 聞いてください。主よ。私の呼ぶこの声を。私をあわれみ、私に答えてください。27:8 あなたに代わって、私の心は申します。「わたしの顔を、慕い求めよ。」と。主よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。27:9 どうか、御顔を私に隠さないでください。あなたのしもべを、怒って、押しつけなさい。あなたは私の助けです。私を見放さないでください。見捨てないでください。私の救いの神。27:10 私の父、私の母が、私を見捨てる時は、主が私を取り上げてくださる。

あそこまで強い信仰の与えられていたダビデが、今、主に憐れみを求めています。その叫びは、「主に受け入れられる」願いです。「御顔を慕い求める」とは、主が自分のほうを向いていてくれるという、安心感です。御顔を背けるというのは、反対に拒絶していることですね。ダビデは感情面でそれを持っています。10 節が興味深いですね、父母が自分を見捨てても、主は自分を見捨てることはない、という言い聞かせを行っています。

27:11 主よ。あなたの道を私に教えてください。私を待ち伏せている者どもがおりますから、私を平らな小道に導いてください。27:12 私を、私の仇の意のままに、させないでください。偽りの証人どもが私に立ち向かい、暴言を吐いているのです。

主の道を教えてくださいよう願っています。今、敵が暴言を吐いているところで、自分はどのように対処すればよいか分からなくなっています。それで主ご自身の示されるところにいたいと強く願っています。そうすれば、安全です。

27:13 ああ、私に、生ける者の地で主のいつくしみを見ることが信じられなかったなら。・・27:14 待ち望め。主を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。主を。

ダビデが絶望しかけています。生ける者の地で主の慈しみを見ることが信じられない、という気持ちになりかけていました。それで、自分に言い聞かせているのです。「待ち望め。主を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。主を。」ダビデは先ほども、「わたしの顔を、慕い求めよ。」と言い聞かせていました。

時に、私たちの信仰の歩みで言い聞かせが必要です。私も思い出しますが、高校三年の時に受験勉強の厳しさで抑鬱的になった時、大学に入学できたのですが、それでも受験に不合格になりかけている夢を生々しく見ました。大学に卒業して何年経ってからも見ていました。抑鬱になった

のが信仰に導かれるきっかけだったのに、クリスチャンになってからなぜその症状が残っているのか？とふと思った時に、ずうずうしく、図太く、「それでも、私は主に愛されている。」と言いかけてました。絶望しかけた時、14 節の御言葉を思い出すことは有益です。

ところで、ダビデが急降下してしまったような祈りをこの詩篇 27 篇は提供していますが、これもまた現実ではないでしょうか？弟子たちがおそらく、イエス様に連れられて高い山に行った時にそうであったのではないかと思います。そこでイエス様の栄光に輝く姿を目撃し、父なる神からの声を聞き、すばらしい体験をしたのですが、麓にまで降りてくると、悪霊につかれている男の子がいて、それを弟子たちが追い出せなかった現場に出くわしました。せっかくすばらしい経験をしたのに、台無しになるような経験が次にやって来ます。私は詩篇が好きです、またヨブ記も好きでしたが、自分がどんなところを通っても、なおのことその現場を通っている信仰の先人たちの祈りを読むことができるからです。

4A 聖別された民 28

1B 悪者から離れる祈り 1-5

28 ダビデによる 28:1 主よ。私はあなたに呼ばわれます。私の岩よ。どうか私に耳を閉じないでください。私に口をつぐまれて、私が、穴に下る者と同じにされないように。

ダビデは、26 篇に続けて悪者といっしょに滅びることのないように、という祈りを捧げています。「私が、穴に下る者と同じにされないように。」と言っています。彼の強い意志をここで見ます、「あなたに」呼ばわれます、そして「私の岩よ」と言っています。この岩に拠り頼むなら、失望されることはないのですから、主には救いがあると彼は強く信じているのです。

28:2 私の願いの声を聞いてください。私があなたに助けを叫び求めるとき。私の手をあなたの聖所の奥に向けて上げるとき。

ここで願いの声を聞いてもらうために、「聖所の奥」に向けて手を上げています。それは至聖所、ケルビムの中に主の栄光が輝く、贖いの蓋、また契約の箱があるところです。ダビデは、自分がどのような悪の力に囲まれていても、それで主が聖なる御座を持っておられることを知っていました。状況が悪化しても、主は御座におられます。その天は、どんなことがあってもびくともしません。

28:3 どうか、悪者どもや不法を行なう者どもといっしょに、私をかたづけしないでください。彼らは隣人と平和を語りながら、その心には悪があるのです。28:4 彼らのすることと、彼らの行なう悪にしたがって、彼らに報いてください。その手のしわざにしたがって彼らに報い、その仕打ちに報復してください。

この世における悪の多くは偽善です。心では悪があるのに、口では平和を語っています。善を志

向していながら、悪が現われ出ます。表向き自分が良い人間に見せながら、心については制御できていません。誰もが、次の真実に向き合わないといけません。「それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」(ローマ 3:10-12)」

28:5 彼らは、主のなさることもその御手のわざをも悟らないので、主は、彼らを打ちこわし、建て直さない。

祈りが聞かれました。ダビデは心の中で、主が彼らを打ち壊してくださることを知りました。

2B 喜びの小躍り 6-9

28:6 ほむべきかな。主。まことに主は私の願いの声を聞かれた。28:7 主は私の力、私の盾。私の心は主に拠り頼み、私は助けられた。それゆえ私の心はこおどりして喜び、私は歌をもって、主に感謝しよう。28:8 主は、彼らの力。主は、その油そそがれた者の、救いのとりで。

主の救いについて、小躍りして喜んでいきます。これは、心が小躍りしているわけではありません。体を使って小躍りしています。ダビデは、神の箱を運ぶ時に踊って主を喜んでいました。

私たち日本人は、一つの霊的な課題があると思います。それは、人の目を気にすることです。「和」を尊ぶという言葉がありますが、はしたないことはしない、感情を表現することは他の人に迷惑になるというものがあります。そして喜びの感情は、人に妬みを引き起こします。それで差し控えるのです。しかし、それは神の目になかったことかというところではありません。ダビデが喜び踊った時に、妻ミカルはそれをさげすんでいました。王服を脱ぎ捨てて、裸になって踊ったと言いました。

だからと言って、私たちは全てが同じ格好をして喜ぶということではありません。そうではなく、人目を気にしないで、他の人には受け入れられないのかもしれないけれども、主に対してそのまま喜びを表現することが大切です。人それぞれが違います。そうですね、多少そうした表現を見ることができるのは、スポーツ観戦でしょうか。自分の応援しているチームが勝った時、あの時の歓喜は、周りのことを考えていません！それで良いのです、私たちは主に対して歓喜の声を上げるのです。

28:9 どうか、御民を救ってください。あなたのものである民を祝福してください。どうか彼らの羊飼いとなって、いつまでも、彼らを携えて行ってください。

ダビデは、再び個人的な救いから、それをイスラエル全体の歴史に当てはめて、神に祈っていま

す。自分自身が悪者と共に滅ぼされずに、救い出されたのですが、今度はイスラエルの民が救われるように祈っています。そして祝福を受けて、主が羊飼いとなって彼らを携えて行かれるように祈っています。

5A 主の栄光 29

29 篇は、自然現象の中で、神の救いが現れる姿を見ます。

1B 天から地へ 1-9

29 ダビデの賛歌 29:1 力ある者の子らよ。主に帰せよ。栄光と力とを主に帰せよ。29:2 御名の栄光を、主に帰せよ。聖なる飾り物を着けて主にひれ伏せ。

「力ある者の子ら」というのは、天の御使いであろうと思われます。ここは天における神への賛美です。聖なる飾り物というのは、天使が身につけている着物でしょう。そして、その天から地上に向けて雷鳴という形で主の声が響きます。

29:3 主の声は、水の上にあり、栄光の神は、雷鳴を響かせる。主は、大水の上にあります。29:4 主の声は、力強く、主の声は、威厳がある。

これはもちろん、雲の中で雷が造られることです。

29:5 主の声は、杉の木を引き裂く。まことに、主はレバノンの杉の木を打ち砕く。29:6 主は、それらを、子牛のように、はねさせる。レバノンとシルヨン若い野牛のように。29:7 主の声は、火の炎を、ひらめかせる。29:8 主の声は、荒野をゆすぶり、主は、カデシュの荒野を、ゆすぶられる。29:9 主の声は、雌鹿に産みの苦しみをさせ、大森林を裸にする。その宮で、すべてのものが、「栄光。」と言う。

地上において、まずレバノンの杉に雷が落ちた場面であります。杉は誇り高い姿を象徴していますが、それが見事に打ち砕かれます。そしてカデシュはずっと南、ネゲブの南の砂漠で、イスラエルの民が約束の地に入ろうとして入れなかったところです。そこにも雷が落ちて、荒野が揺さぶられます。そして、大森林も木々が倒れます。自然全体が神の宮となり、そして「栄光」と言うのです。

なぜ、雷がこのように主の声であり、神の栄光なのでしょう？ 事実、黙示録で天において雷鳴が聞こえます。またシナイ山に主が降りて来られた時も雷鳴がありました。けれども、なぜ雷鳴が主の栄光なのでしょう？ 私たちはヨブ記で習いました、神は雷や稲妻によって人々の営みやめさせるからです。どんなに誇り高い営みも、雷が落ちたところで避難しなければいけません。人はその鳴り響きの前でただ自然の驚異にひれ伏さないといけません。これが、主の声であり、神の栄光であると言われる所以です。

それはあたかも、ダビデがこれまで祈ってきた神の救いと同じであります。悪者たちが、へつらいながら生きています。口では良いことを言っていますが心では悪に傾いている世界です。そのようなことをして主なる神の栄光が見えなくされ、人が誇り高ぶっている世の中になっています。しかし、主はそれを裁かれます。雷が地上に落ちるのと同じように、主が力をもって現れれば、これらの高ぶりは低くされるのです。そこでは、自分が主張したい、意志を通したいこと、自分自身を求めたいことを、これらのものが退けられ、専ら神に服するのみなのです。

2B 大洪水の時の御座 10-11

29:10 主は、大洪水のときに御座に着かれた。まことに、主は、とこしえに王として御座に着いておられる。29:11 主は、ご自身の民に力をお与えになる。主は、平安をもって、ご自身の民を祝福される。

雷鳴による主の栄光から、今度は大洪水による主の栄光を描いています。ノアの時代の大洪水です。その時に世が悪に傾いて、邪悪を極めたのですが、水によってすべてを滅ぼしました。そのことによって、ただ神の御座だけが高められたのです。雷鳴という自然現象において、小規模に行われている主の栄光の現れが、世界的に大洪水によって現われたということです。そしてダビデは、その幻を主がお見せになることによって、イスラエルの民も力が与えられると言います。この世にあって悪者がいるけれども、そしてその悪が自分たちにまわりつくのだけれども、主が裁いて、悪者を選び分けてくださり、自分たちを救ってくださるので、平安をもって神の祝福の中で生きることができます。

いかがでしょうか？使徒パウロはガラテヤのキリスト者たちに、こう言いました。「キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。(ガラテヤ 1:4)」主がすべての罪と悪を十字架につけてくださいました。そこで裁いてくださいました。そこに私たちも留まるのなら、ちょうど大洪水からノアが箱舟で救われたように、私たちも罪と悪から離れて救われることができます。

ですから、ダビデが初めに祈ったように、自分が誠実と正しさの中で保たれているか確かめながら生きないといけません。そして、主の家に入ってその中で自分の清さを保ちます。そうすれば、主は私たちが悪者と同じように滅びるようにすることはなく、確かに選び分かれた民として祝福を受けて生きることができます。最後にコリント第二、6章の最後の二節を読みます。「それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」(17-18節)」